

平成22年4月1日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19720091

研究課題名 (和文) 韻律語形成の適格性を制御する音韻特性の研究

研究課題名 (英文) Studies on the phonological properties governing grammatical processes of Japanese prosodic morphology

研究代表者

那須 昭夫 (NASU AKIO)

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：00294174

研究分野：言語学, 音韻論

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：プロソディ, オノマトペ, 短縮語, 語形成, 有標性, アクセント, 最適性理論

1. 研究計画の概要

本研究のねらいは、日本語におけるプロソディ主導型の語形成現象（韻律語形成）について、その適格性を制御する音韻的特性を明らかにすることである。以下の課題に即して研究を進める。

(1)オノマトペの韻律語形成現象：オノマトペの諸形式に観察される音韻特性を観察・分析し、オノマトペの形態派生過程においてどのような韻律的諸原理が作用しているかを明らかにする。既存の語形に加え、辞典等に掲載されにくい形式ならびに、独創性・新造性を伴う形式も分析対象とすることで、言語形式の生産的側面に働きかける原理や規則を見出してゆく。

(2)一般語種の韻律語形成現象：外来語短縮や混成現象など、オノマトペ以外の語種に発生する韻律語形成現象の特性をとらえ、オノマトペにおける現象との異同を探る。外来語辞典・新語辞典などのデータベースを活用するとともに、臨地調査等の手法を交えながら言語事実を収集し、音韻構造データベースを構築しつつ分析を進める。その過程を通じて、語種や言語の違いを超えた一般的な韻律特性を把握してゆく。

2. 研究の進捗状況

(1)オノマトペの韻律語形成現象

①音韻構造の非対称性の探究：オノマトペの形態音韻現象に観察される非対称性について考察した。特に、有声化と強調化の二過程においてともに一般形と特殊形との間に含意的普遍性が成り立っていることを明らかに

にした点は、音韻理論研究においてオノマトペを探究対象とすることの意義を十分に主張し得る成果である。

②新造語の音韻構造：新語が作り出される際の音韻特徴について考察し、子音・母音の組み合わせに一定の割合で無標構造が起こりがちであることを見出した。この知見は、語形成過程の出力にしばしば無標構造が現れがちであるとする先行の音韻理論の予測を裏づけるものとして意義がある。

③語末促音：オノマトペの語末促音には瞬間性の語感を表す特有の象徴効果があるとの従来の観察に対して疑義を呈し、言語事実を統計的見地から検討した上で、語末促音が意味的に透明であること、および韻律調整機能を有していることを理論的見地から明らかにした。この知見は、事実・理論の両面から従来の通説に対し再検証を迫るものである。

④部分反復形：部分反復構造からなるオノマトペは、日常よく用いられながらも辞典に掲載されにくい語形である。この語形に含まれる繰り返し要素が、軽音節を鋳型として規則的に作り出されることを明らかにした。この知見は、語形の適否が韻律特性によって制御されていることを直接示すものである点で、本研究にとって特に重要な意義がある。

(2)一般語種の韻律語形成現象

①複合外来語由来短縮語：短縮外来語の形成過程に見られる音韻特性を探った。特に撥音「ン」が短縮語中に有意に残存しやすいことを統計的見地からつきとめ、撥音残存の要因がその構造特性に由来することを明らかにした。

②アクセントとの関わり：短縮語形成に観察される撥音の構造特性がアクセント形成にも特異な作用を示していることを、外来語の平板型アクセント生成の事実から明らかにした。この知見は、相の異なる複数の音韻現象の背後に同一の音韻的原理が共通に機能していることを示すものであり、音韻論の目指す現象間の普遍性の把握という課題に貢献し得るものである。

③混成語：語形成実験の準備および予備検査の検証を進める中で、音節の組成・特殊モーラのタイプ・アクセント形式の各点における構造的および質的相違が出力パターンへの予測に關与しているとの手掛かりが得られた。現在、この予測の検証に必要な検査のデザインを構築している。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

オノマトペならびに一般語種での韻律語形成現象について、当初想定していた範囲を超える多様な言語事実の分析を行うことができた。特にオノマトペについては、得られた知見の多くが今後の音韻理論研究の展開に十分に貢献し得るものである。一般語種についても、言語事実の記述・分析および検査方法の構築がほぼ計画通りに進捗している。以上の点から、達成度を上述のように判断した。

4. 今後の研究の推進方策

(1)オノマトペの分析

次の諸点を中心に継続的に探究を進める。

①語末促音：促音をめぐる表記と発音の関係の実態を探り、ピッチ動態の観察といった実証的な方法も採り入れて、これまでの分析で得られた予測を検証する作業に入る。

②部分反復現象：反復辞の生成過程において無標構造の表出が志向されていることを、最適性理論における制約の階層関係を通じて明らかにしてゆく。

(2)一般語種の分析

短縮・混成の過程に関して、これまでに得られた予測や記述の内容を検証すべく語形成実験を実施し、その結果について迅速かつ慎重な考察を進める。

(3)研究の総括

最終年度の課題として、オノマトペと一般語種との間の異同に関する総合的考察を行う。特に、出力形式の無標性・特殊モーラの影響・音節構造・アクセント構造などの側面に焦点を当てながら、日本語という言語におけるオノマトペの音韻論的位置づけに関して考察を推し進めるとともに、言語普遍性の観

点から見た日本語の韻律特性の解明へと進みたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 那須昭夫, 「特殊モーラの分節構造と安定度」, 『文藝言語研究(言語篇)』, 第56巻, pp. 53-71, 2009年, 査読有。
- ② 那須昭夫, 「新しく生まれるオノマトペ—新造語の音韻特徴—」, 『國文學』, 第53巻14号, pp. 80-88, 2008年, 査読無。
- ③ 那須昭夫, 「オノマトペの言語学的特徴—子音の分布と有標性—」, 『日本語学』, 第26巻7号, pp. 4-15, 2007年, 査読無。
- ④ 那須昭夫, 「オノマトペの語末促音」, 『音声研究』, 第11巻1号, pp. 47-57, 2007年, 査読有。

[学会発表] (計2件)

- ① 那須昭夫, 「部分反復オノマトペにおける韻律写像と無標志向性」, 関西言語学会第34回大会, 神戸松蔭女子学院大学, 2009年6月6日。
- ② 那須昭夫, 「音韻構造から見たオノマトペの位置」, 関西言語学会第33回大会, 大阪樟蔭女子大学, 2008年6月7日。

[図書] (計1件)

- ① Nasu, Akio. "Phonological markedness and asymmetries in Japanese mimetics", Kubozono, Haruo (ed.) *Asymmetries in Phonology: An East-Asian Perspective*, pp.49-76, Kurosio Publishers, 2007, 査読有。

[その他] (研究資料)

- ① 那須昭夫 「研究資料：複合外来語由来短縮語の音韻構造」, 2008年, 筑波大学人文社会科学研究科。